

Title	古版経済書解題 一千八百二十三年トマス・ロバート・マルサス著 価値の尺度
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.8 (1943. 8) ,p.740(68)- 766(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19430801-0068
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430801-0068">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430801-0068</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

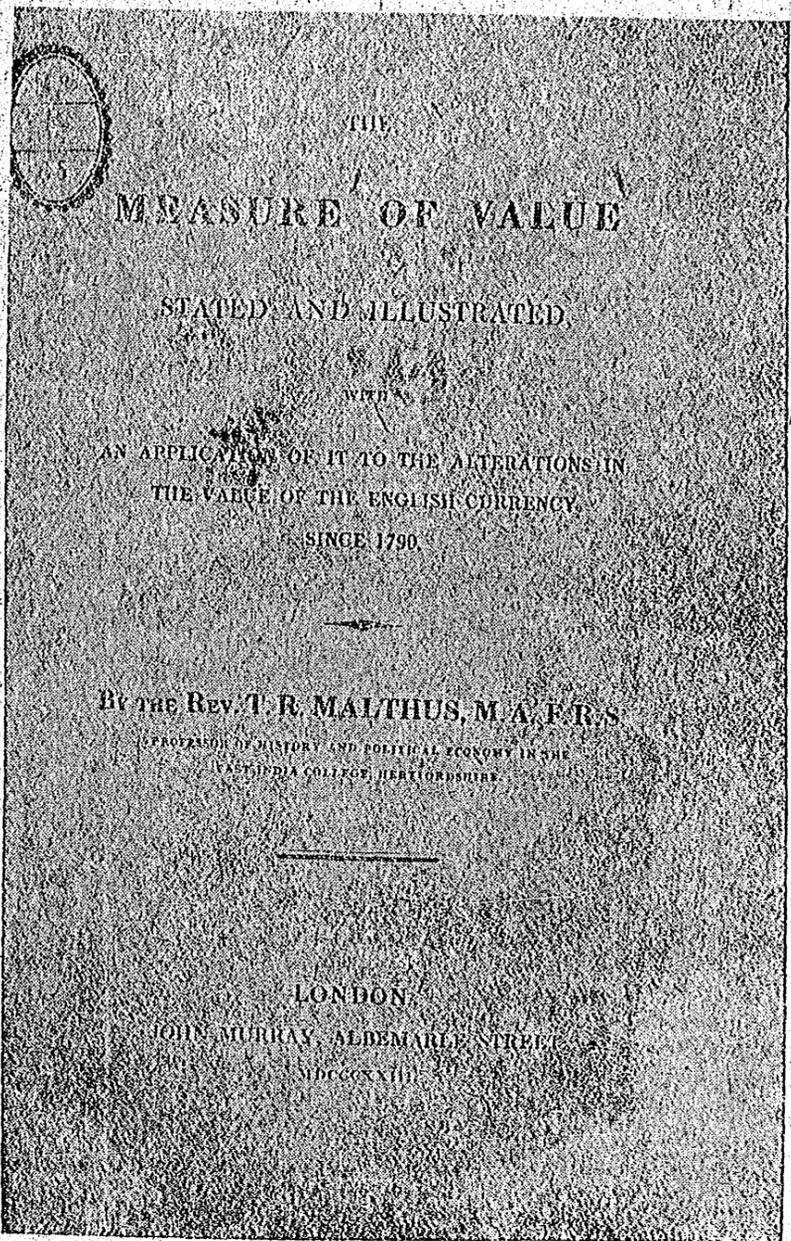
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古版經濟書解題

一千八百二十三年版トマス・ロバート・マルサス著『價値の尺度』

高橋誠一郎

トマス・ロバート・マルサスが『價値の尺度の叙説及び例示、附、一千七百九十年以後に於ける英國通貨價値に於ける變動に對する其の適用』(The Measure of Value stated and illustrated, with an application of it to the alterations in the value of the English currency since 1790) を公にしたは、一千八百二十三年、即ち彼れが五十七歳の時であつて、此の『人口論』の著者がハートフォード近傍のヘイリイベリイに設けられた東印度學校の歴史及び經濟學の教授に任命せられ此處に彼れが長閑に其の終生の事業に従事す可き安住の地を看出してから十八年の後であり、又、彼れがバスに近いクラヴァートンの其の妻の實家に於いて會つて自覺したことのなかつた心臓疾患の爲めに其の平靜なる學究的生涯の幕を閉する十一年前のことである。此の書は緒言五頁本文八十一頁より成る八折判の小冊子であつて、彼れの名を成さしめた『人口論』第五版以下と等しく倫敦アルベマール街のジョン・マレーから出版せられたものである。印刷者は同じく倫敦デンプル・バプ、ベル・ヤードのシイ・ローファースである。



## 二

早くよりして幾多の經濟論者等は、眞實且つ固定の價值を有し價值の尺度を形成するの適性を有する物件を追求し、而して、其の或る者は労働に於いて價值の眞尺度を構成する所のものを發見し得たと想像した。サー・ウィリアム・ペネイは労働を以つて單に價值を創造するのみならず、又之れが尺度たるものであると思惟した。(A Treatise of Taxes & Contributions, 1662, pp. 24-25; Political Anatomy of Ireland, 1691, p. 64, 66-67. 昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』二六六—二六七頁参照)。同一の思想は又シ・シン・ハリスによつて表明せられ、労働の價值は總べての貨物の價值を支配する主たる標準と認められた。(An Essay upon Money and Coins, Pt. 1, 1757, p. 89. 前掲拙著四〇八—四〇九頁参照)。

アダム・スミスも亦、交換價值の眞尺度たるものに就いて考察した。彼れが一般經濟生活の複雑なる事情から抽象して、單純、原始、自然の状態に自己を限定した時、彼れは諸貨物の費す労働量が是れ等のもの、交換に於いて支配する量と當然同一と看做され得るものと思惟した。然しながら、彼れが價值現象の經驗的理論に到達し、現實生活に於いて看出さるゝが儘に之れを考察した際には、或る貨物を取得し若しくは生産するが爲めに通常使用せらるゝ労働量が、其の通常購入し支配し又は之れと交換せらる可き量を支配し得る唯一の事情に非ざることを發見し、而して支配労働量の標準のみが唯り適用せらる可きことを主張した。(Wealth of Nations, Bk. 1, chaps. 5-6)。

然るに、反スミス經濟學者ローグデール伯は、労働が最早價值の尺度として看做さる可きに非ざることを主張し、却つて、何物と雖も、あらゆる時、あらゆる場所に於いて精確なる價值の尺度を形成するの性質を有し得るものなきの事實が承認せられたと聲明した。(An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, and into the

means and causes of its increase, 2nd ed., 1818, p. viii)。彼れは交換價值の尺度を求めんとする經濟學者等の努力を以つて、恰も仙丹(philosopher's stone)を捜し求むる鍊金家の其れと等しく不合理であり且つ望みなきものであると考へた。彼れはスミスの意見を批評し、(ibid., pp. 22 ff.)、而して『國富論』中の種々なる箇所において、労働が相異なる時期及び相異なる場所に於いて價值を異にするの事實が明記せられ若しくは暗示せられつゝあるを指摘して、彼れが労働を以つて價值の尺度たらしむるの矛盾を立證せんとした。(ibid., p. 30 ff.)。

古典的經濟理論の完成者デーヴィッド・リカードオは其の『經濟原理』の筆をローグデールと等しく、價值の完全なる標準の可能性に關する論述に起し、而して一貨物の價值、即ち之れと交換せらる可きあらゆる他の貨物の量は其の生産に必要な労働の相對量に依存するものであつて、該労働に對して支拂はるゝ報償の大小に依存するものに非ずと做すの論旨に到達した。彼れは價值の不變的標準若しくは尺度を以つて極めて望ましいものと思惟せるが如くであるが、而も現在及びあらゆる時に於いて、之れを生産するが爲めに精確に労働の同一量を要する貨物は存することなきを信するが故に、價值の一定の標準を選定するを以つて不可能と看做した。縱令ひ、這般の貨物が存するとしても、資本が前拂ひせらるゝ期間の相違は之れを無効ならしむ可きものである。而も、彼れは金銀に在つては變化の極めて少なきを看出し、貨幣を以つて日常の目的の爲めには其の價值に於いて充分に安定なるものと認めた。而して、彼れは労働支配標準が斯くの如く使用せられることが出來ると云ふ想念の苛烈なる批判者となつた。彼れを以つて觀れば、諸貨物が相對的價值に於いて變化した場合には、其の孰れが眞の價值に於いて下降し、又、孰れが昂騰せるかを確定するの手段を有することは望ましいことであらう。而して、斯くの如きは、唯り、其れ自體、他の貨物が蒙るの虞れある變動の孰れをも受けることのない一定不變なる價值の定規に對して順次に是れ等の

のを比較するに依つてのみ遂行せられ得可きであらう。然しながら、其れ自體、其の價值を確定せられようとする諸物と同一の變動を蒙る虞のない貨物は、一も存することがなく、換言すれば、其の生産の爲めに要する労働の増減を受けないものは一も存することがないが故に、斯くの如き尺度を有することは不可能である。而も、這箇或る媒介物の價值に於ける變動の原因が除去せられることが出来たとしても、例へば、吾人が貨物の生産に同一量の労働があらゆる時に於いて要せらる可きことが可能であつたとしても、猶ほそれは價值の完全なる標準若しくは不變なる尺度たることがないであらう。蓋し、貨幣を生産するが爲めに必要なる可き固定資本と、吾人が其の價值の變動を確定せんと欲する他の貨物を生産するが爲めに必要なる可き固定資本の割合が相異なるが爲めに、それは貨幣の騰落からして相對的變動を受く可きが故である。貨幣は又、貨幣及び之れと比較せらる可き貨物に對して使用せられた固定資本の持續性の程度を異にするが爲めに、換言すれば、其の一方を市場に致すが爲めに必要なる時間は、其の變動を決定す可き他の貨物を市場に致すに必要な時間よりも長短ある可きが故に、それは同一原因からして變化を受く可きである。(Principles of Political Economy, 3rd ed., 1821, chap. I. sect. vi.)

## 三

然るに、マルサスは逡巡動搖しながらも、常にスミスの支配労働標準尺度説を擁護した。彼れは其の『經濟原論』の初版に於いては、如何なる一貨物も正當に眞交換價值の標準尺度として思料せらるゝを得ざるの觀あるものと做した。而して、労働を包含しつゝある生活の必需品、便宜品及び娛樂品に對する一定特殊貨物の支配力を決定す可き底の總べての貨物の比較的價格の見積りは唯り行使に取り餘りに困難且つ辛苦であるばかりでなく、概して全然實行不可能なる可きである。然しながら、彼れは、二物件は、或る場合には、一物件のみよりも眞交換價值のより

良き尺度であり、而して猶ほ充分に實際的適用に供し得可きものであらうと思惟した。(Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820, p. 128.) 一定品質の穀物の或る定量は、或る數の人類を支持する其の能力によつて常に確定且つ不變の使用價值を有するも、而も其の眞實及び名目交換價值の兩者は、唯り年々のみならず、世紀世紀にも亦餘程の變化を受ける。従つて、年から年にかけてと等しく世紀から世紀に互つて、穀物の一定量は、或る特殊貨物が交換に際して支配す可き生活の必需品、便宜品及び娛樂品の定量を測定することが甚だ不完全なるの觀がある。(Ibid., pp. 126-128.) 同一の考察は、吾人が若しアダム・スミスによつて提唱せられた尺度たる自備労働を取るとしても當て嵌まるであらう。一日の労働の價值は其の支配する貨物の定量が變する時には變化する。然しながら、是れ等二物件の孰れのものとも雖も、單獨に取られたならば、満足なる價值の尺度と看做されることを得ないものであるが、而も兩者を結合するに由つて、吾人はより大なる正確さに到達し得可きものとマルサスは思惟した。(Ibid., p. 128.)

斯くて、彼れは穀物と労働との間の中數が彼れの欲求する尺度であると考へたのである。彼れは、労働に比較して穀物が高價である時には、穀物と比較して労働は必然低廉でなければならぬと云ふ想定の上に其の議論を進める。穀物の一定量が生活の必需品、便宜品及び娛樂品の最大量を支配す可き時期に於いては、労働の一定量は常に斯くの如き物件の最小量を支配す可きである。而して、穀物が是れ等のものゝ最小量を支配する時期には、労働は其の最大量を支配す可きである。然らば、吾人にして兩者の間の中數を取らんか、吾人は明かに反對的方向に於ける各々の同時期的變化によつて補正せられた尺度を有するであらう。(Ibid., pp. 128, 129.) 然しながら、マルサスは、斯くの如き目的の爲めには、吾人は、量に關して、一日の労働に對する等價物と看做され得可き穀物の或る量目を

決定す可きことが必要であると観た。茲に畧々好時期に於ける一優良労働者の平均一日の收得たる小麦の一ペックなる樹目が選定せられる。斯くて、異なる時期に於いて同数の日傭労働及び小麦のペック若しくは各々等しい割合に於いて取られた是れ等のもの、部分を購入す可きあらゆる貨物は這般の原理に基いて生活の必需品、便宜品及び娯樂品の同一量に畧々近いものを支配しつゝあるものであり、従つて又、異なる時期に於ける其の眞實交換價值を可成りに近く保持しつゝあるものと看做され得可きものである。而して、異なる時期に於いて斯くの如く取られた穀物及び労働の異なる量を購入することが看出されるあらゆる貨物は、殆んど全く變化を受ける尺度と比較して變化したことが明かなる可く、従つて又、之れに比例せしめ得るやうに其の眞實交換價值に於いて變化したことが推定せられ得可きである。(ibid., pp. 129-130.)

マルサスは茲に提唱せられた尺度の主たる缺點が、異なる國々及び異なる時期に於いて、日傭労働の成果及び製造せられた貨物の價格を變じつゝある資本、機械及び分勞の結果から生ずることを認める。然しながら、彼れを以て觀れば、是れ迄に提言せられた如何なる近似物と雖も、敢て是れ等の變化しつゝある結果を測定すると稱したてとは會つてなかつたのである。(ibid., p. 130.)。マルサスに取つては、異なる時期に於ける價值の完全なる尺度を取得するの問題は存することなくして、交換價值の不完全なる尺度と必然的且つ根本的に謬妄なる其れとの間に選擇を行ふの問題が存するのである。(ibid., p. 132.)

穀物及び労働の價格を以つて、採用せられ得る最も接近せる實際的近似物と觀るの意見は、實にマルサスによつて其の一千八百十五年の小冊子「地代の本質及び増進の研究」中に夙に其の片鱗を示された所であつた。(An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the principles by which it is regulated, 1815, p. 46.)。然しながら、

斯くの如き合成的標準に對する彼れの信念は、『原論』初版起稿の當時に於いても、既に動搖を免れざりしものゝ如く、其の第三章第六節に於いては、前記小冊子中の前掲章句を、アダム・スミス其人によつて尺度として提唱せられたが如き穀物の價格なる舊範式によつて置き換へたのである。(Principles, op. cit., p. 198.)

彼れの論敵リカードの眼には、完全なる誤謬が斯くの如き労働及び穀物より成る合成的價值尺度に關するマルサスの議論中に包含せらるゝものとして映じたのである。マルサスは言ふ、穀物は可變的なる貨物であり、而して、労働も亦同じく可變的であるが、然も、是れ等のものは常に異なる方向に變化すると。リカードは穀物及び労働が果して異なる方向に變化するであらうかを問題とした。而して、彼れは是れ等のものが同一の方向に變化することを論證するを得たりと信じて、マルサスが爾く不完全にして且つ爾く可變的なる標準を放棄するの得策なるを會得せんことを希つた。(Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" by David Ricardo, edited with an introduction and notes by Jacob H. Hollander and T. E. Gregory, 1928, pp. 40, 41.)

## 四

マルサスは、其の『原論』初版出版の後三年にして公にせられた小冊子「價值の尺度」に於いては、其の前著中に在つて、穀物及び労働間の中敷を以つて單なる労働のみよりも優れた價值尺度たり得可きものと思惟した自己の誤謬を率直に承認し、而して労働のみが眞の尺度たることを悟了せる旨を告白した。(The Measure of Value, 1823, p. 23, n.)

彼れは經濟學が主として關與する價值は使用價值ではなくして、交換價值、即ち、交換に於いて他の物件を支配するの力を表明するものであつて、人類の最も重要な欲望滿足上に於ける其の有用性を表示するものではないと

観る。(ibid. p. 1.)。常に同一價值を維持する或る物件の尺度に於いて見積られたらゆる貨物の價值は正しく其の絶対價值若しくは自然價值と呼ばれるを得可きである。之れに反して、一なるにせよ又多數なるにせよ、變化するの傾きある他のものに於いて見積られた或る貨物の價值は唯り其の名目價值若しくは相對價值、即ち或る特殊の貨物に關し若しくは一般貨物に關しての其の價值と看做さるを得るに過ぎない。(ibid. p. 2.)。異なる貨物が影響せらるゝ生産の變化しつゝある便宜並びに需要及び供給の變化しつゝある状態の下に於いて一般に購買力を測定することを得ないにせよ、上述せるが如き絶対にして自然なる價值の正確なる尺度たり得る何等かの物件が存するや否やは實に此の研究の特殊の目的たるものである。(ibid. p. 3.)。

貨物の大多數の供給の條件は、報酬が是れ等のものゝ生産に必要な賃銀、利潤及び地代を支拂ふに足るものでなければならぬと言ふことが、アダム・スミスの原理からして直ちに推論せられる。是れ等の支拂が其の當時の普通の相場で貨幣に於いて行はれるならば、是れ等のものはスミスが其の自然價格と呼ぶ所のものを形成する。而も、吾人は貨幣が可變的であることを知る。然しながら、吾人にして若し貨幣に代ふるに、自然的貨幣價格が支配すると同じき生産及び蓄積の力を生産者に與ふるに必要な諸物件を以つてするならば、斯くの如き報酬は貨物の供給の自然的條件と看做さるを得可く、又、是れ等のものゝ自然價格に對して其の自然價值と名附けらるを得可きである。是れ等供給の三要素、即ち自然價值の三要素の中で、最初の二つのものが明かに最も重要である。是れ等のものは嘗だに土地の領有發生以前の初期社會段階に在つて唯一の供給條件であるばかりでなく、改良の最も進んだ段階に於いても大なる部類の物品に關して依然として然るものである。而して、賃銀の基礎である進歩しつゝある國家の植物性主食物すら殆んど専ら賃銀及び利潤に分解することを得るものであつて、殆んど全く地代を支拂ふ

ことのない其の産物の部分と必然同一價值のものでなければならぬことが今や一般に承認せられてゐる。是に於いて乎、マルサスは、其の比較的單純なる形態に於ける物品の自然價值は労働及び利潤から組成せらるゝことを差し當り推定して本質的誤りなきものであると思惟したのである。(ibid. pp. 3-4.)。

彼れは又、労働のあらゆる一定量が其の支配し若しくは其の現實に交換せらるゝ賃銀と同一價值を有さなければならぬことを以つて容易に承認せらる可き公準であると考へることが出来る。價値の二主要要素たる労働及び利潤の中で、前者が遙かに最大且つ最有力なるものである。(特に、直接労働のみならず、蓄積労働をも包含するとしたならば)。労働は生産の大なる手段である。諸貨物の生産及び這般の生産に力を添へる用具の生産に、労働以外に他の如何なる成分も要せらるゝことなく、又、其の労働の努力と完成せられた貨物に於ける其の報酬との間の間隔が全然度外視せられてもいゝ程僅少であるとするならば、確かに、同一労働量は諸貨物を相互に對し又是れ等のものに對する需要に對して同一相對的割合に於いて生産する不斷の傾向を有するが故に、是れ等のものは平均してそを取得るに使用せられた労働量に従つて相互に交換せらるゝことが看出さる可きである。(ibid. pp. 5-6.)。

然しながら、極めて初期の社會に於いても、或る種の労働の努力と其の使用せらるゝ物品の完成の間には可成りの時間が経過しなければならぬ。而して、單なる労働の結果以上に出でた次ぎの最單純なる生産形態は、直接其の貨物に、又其の生産に必要な單純なる道具に使用せらるゝ労働に加へて、其の供給の條件が、其の労働の前拂ひの時期から労働者若しくは資本家が報償せられ得るまでに経過した時間に對する最後の報酬に於いて一定の補償の行はれることを要求する場合の其れである。這般の補償が其の労働の前拂ひに對して支拂はれなければならぬ利潤

である。然しながら斯くの如き事態に於いては、諸貨物は是れ等のものゝ上に使用せらるゝ労働量に従つて相互に交換せられざるに至る。蓄積せられた労働及び直接労働の同一量が使用せられた一定の貨物は、是れ等のものゝ構成に參加した利潤の量の異なるが爲めに異なる交換価値を有す可きである。(Ibid., pp. 8-9.) 文明開化の諸國に於ける諸貨物の大多數は少くとも二要素、即ち労働及び利潤から成るものであることは遍く承認せらるゝ所である。随つて、是れ等二要素が其の供給の條件として參加する諸貨物の交換価値は、前拂ひの報酬と固定及び流動資本の割合の兩者が正確に同一なる極めて特殊な場合に於ける外は、是れ等のものゝ上に使用せらるゝ労働量に専ら依存することがないであらう。斯くて、諸貨物に使用し盡された労働が是れ等のものゝ交換価値の尺度であると云ふことは何等正確に近いものと稱せらるゝを得ない。(Ibid., p. 13.)

然しながら、諸貨物中に使用し盡された蓄積労働及び直接労働に對して其の前拂ひせらるゝ期間の全前拂ひに對する利潤が加へらるゝならば、價值の他の要素に對して適當なる對酌が行はれ、又更らに正確なる尺度を取得することが期待せらるゝを得可きである。吾人にして若し貨幣若しくはあらゆる他の媒介物に於いて前拂ひせられた労働の價值を見積るとすれば、吾人は、勿論、同一の媒介物に於いて利潤を見積る可きである、而して斯くの如き媒介物に於いて見積られた貨物の自然價格は、明かに、其の貨物に費さるゝ蓄積労働及び直接労働の價格と斯くの如き前拂ひに對して見積られる通常の利潤を一緒にしたものに等しかる可きである。然しながら、吾人にして若し供給の自然的條件に對する見地を以つて、吾人が何等他の媒介物に關することなく、單に前拂ひせらるゝ労働量のみを考察するならば、吾人は固より又労働量に於いて利潤を見積らなければならぬ。是れに依つて、吾人は恰も、労働が其の構成に參加する唯一の成分であつたとしたならば、是れ等のものが其の上に使用せらるゝ労働量に従つて

相互に交換せらるゝと恰も同一様に、諸貨物が相互に交換せらるゝ可く看出さる可き割合に於ける労働の高を與へらる可きである。(Ibid., pp. 13-14.) 然らば、同一の國家に於いて、又同一時に於いて、労働及び利潤のみに分解せられ得る貨物の交換価値は、是れ等のものに現實に使用し盡された蓄積労働及び直接労働に、労働で見積られた總べての前拂ひに對する利潤の變動しつゝある高を加へることから生ず可き労働量によつて精密に測定せらるゝの觀がある。而も、斯くの如きものは是れ等のものが支配す可き労働量と必然同一でなければならぬ。(Ibid., pp. 15-16.)

## 五

恐らく同一の場所及び同一時に於いては、殆んどあらゆる貨物が他のものゝ相對的價值の精密なる尺度と看做さるゝを得可く、而して、此の點に於いては労働に就いて眞なる所のものは織物、棉、鐵若しくはあらゆる他の貨物に就いて眞であると稱せられるであらう。同一時に於いて、又同一の場所に於いて同一品質の織物、棉、若しくは鐵の同一量を購入し若しくは支配す可き如何なる二貨物も同一の相對的價值を有す可きであり、換言すれば、相互に交換せらるゝ可きである。斯くの如きことは吾人が同一の時及び場所を取り、而して單に相對的價值のみを考察するならば、容易に是認せらるゝ可きであるが、而も、時と所とに何等かの幅員を許すか、若しくは吾人が單に相對的價值のみではなく、絶對的及び自然的の其れをも考察するならば、然らざるものである。(Ibid., pp. 16-17.) マルサスを以つて觀れば、貨物の供給の條件、即ち其の自然價值を表示し得るは其の支配す可き労働の數量であつて、如何なる他の貨物の數量でもなし。(Ibid., p. 18.)

斯くて次ぎの如きことが認めらるゝ可きである。第一に、諸貨物が労働のみによつて取得せられ、而して直ちに賣却せらるゝ際には、是れ等のものは、平均して、其の上に使用せらるゝ労働量に従つて相互に交換せらるゝ可きこと、

第二に、利潤が關與せしめられ、而して其の率若しくは量の孰れかに於いて相違する際には、諸貨物は最早、偶然に由るの外、使用せらるる労働量に従つて相互に交換せらるるを得ざること、第三に、其の生産に適用せらるる蓄積せられた労働及び直接労働の量は、總べてのより複雑ならざる場合に於いて、利潤が正しく計算せらる可き前拂ひを形成しなければならぬこと、而して、第四に、利潤が是れ等の前拂ひに對して計算せらるる際には、依つて以つて諸貨物が同一國內に於いて相互に交換せらるることが經驗によつて看出さるる労働量が取得せらるること、更らに又、這般の労働量は管だに互に其の交換價值を正確に表明するばかりでなく、其の供給の條件に關して是れ等のもの、絶對且つ自然の價值を正確に表明することが是れである。(Ibid., pp. 18-19.)

同一時に於ける相異なる國々の場合には、交換は労働によつて決定せられずして、貨幣價格に依る。而して貨幣は一國に於けると他の國に於けるとでは甚しく異なる價值を有する。是に於いて乎、マルサスは、同一國內に於ける諸貨物の自然的及び相對的價值の諸要素を知つて居り、更らに若し別箇の國々に於ける貨幣の價值に於ける相違をも知るならば、吾人は直ちに相異なる國々の諸貨物が相互に交換せらる可き比率を知る可きであると思惟した。而して、夫々の國々に於ける産物の價值の自然的要素と結合して、是れ等の國々に於ける諸貨物の現在の自然價格、即ち是れ等のものが現實に相互に交換せらるる比率を組成す可き相異なる國々に於ける貨幣の價值に關しては唯だ一つの想定が存するのみである。(Ibid., p. 20.) 農業労働は、最も平凡なる種類の労働であり、直接に労働者の食料を生産し、又、土壤の等級及び利潤の必然的變化と最も直接に結合せられてゐると云ふ明白な理由に據つて選ばれるのである。又、アダム・スミス、リカードオ及び其の他の經濟學者と共に、平均して、他の種類の労働が農業労働に

對して依然同一の比例を保持することが推定せられる。(Ibid., p.) 印度に於ける一日四片の一千五百日の労働と英國に於ける三志の労働とは夫々二十五磅と百五十磅とを意味す可く、而して若し三百日の労働の價值に相當する固定資本が是れ等の各々に對して前拂ひせられ、而も、日労働に於いて計算せられた利潤は印度の場合には二割であり、英國の場合には一割であるとするならば、其の結果は、其の自然價值若しくは供給の條件が、一方に在つては消費せられた一千五百日の労働並びに一千八百日の労働に對する二割の利潤より成る一千八百六十日の労働即ち三十一磅の貨幣價格を、他方に在つては一千五百日の労働並びに一千八百日の労働に對する一割の利潤より成る一千六百八十日の労働、即ち一百六十八磅の其れを要求す可き一貨物たる可きである。各々の國に於いては、其の自然價值が殆んど同一なる英國及び印度に於ける二貨物の自然價格に於ける斯くの如き莫大なる相違は、唯り英國労働者及び資本家の精力、技巧及び地位に由つて、貴金屬の購入に於いて英國の労働の有効率が印度の其れに比較して甚しく優越せるによつて生ぜしめらるる貨幣價值に於ける相違からのみ生じ得可きものであらう。然しながら、其の貨幣を鑛山から市場に齎すに現實に使用せられた労働量は英國若しくは印度に於ける其の貨幣の眞の現在價值を吾人に告げることがないであらう。(Ibid., pp. 21-23.) 前述の如く、前著中に於いて、穀物と労働との間の中敷が單なる労働のみよりも優れた價值尺度たるを得可きものと思惟したマルサスは、本書中に於いては、労働のみが眞の尺度であることを信するに至つた旨を表明したのである。斯くて、彼れはアダム・スミスの見解に復歸し、一物件が購入若しくは支配す可き夏期及び冬期賃銀の平均を取つた平凡な農業労働の高が廣く異なる場所及び時に於いても猶ほ、之れが價值の好尺度であると主張したのである。(Ibid., p. 23.)

彼れに従へば、同一國內に於ける隔絶せる時期に於ける諸貨物の變動しつつある價值を考察するに至つた際には、

吾人は二個の相異なる國々の場合に於けるが如く、現實の交換に訴へることが出来ないが、而も、吾人は猶ほ其の尺度として労働を使用することが出来るのである。吾人は初期の社會に於いては利潤がより高いことを認めなければならぬ。(ibid., p. 24)。而して、利潤と賃銀とが反對に變化すると云ふ一般命題に基いて、縱令ひ穀物賃銀は騰貴しても、利潤は之れに比例して下落し、而して、其の労働購入力によつて測定せられた産物の全價值は同一でなければならぬ。(ibid., pp. 27-29)。マルサスを以つて觀れば、「總べての國々に於いて、又總べての時代に於いて、利潤は、何等の地代をも生ずることのない土地の上に於ける、若しくは同様の資本を以つてする労働者等に必要品を備ふるに要する労働量に依存する」と云ふリカードの命題よりする正統なる推論は労働の不變的價值である。(ibid., p.)。十人の労働者を支配する産物を取得るが爲めに、六人、七人、八人、若しくは九人の労働者が要せらるゝならば、是れ等相異なる場合に於いて労働に赴く其の産物の比率は十分の六、十分の七、十分の八若しくは十分の九であつて、十分の四、十分の三、十分の二、若しくは十分の一を利潤として残す可きである。其の價值が二箇の要素から構成せらるゝ、或る一定の物品が、是れ等の諸要素の一方の價值が増加する際には、他方のものゝ價值が正確に同一程度に於いて減少するが如き性質のものであることを明かにせられ得るならば、斯くの如き物品は不變的價值を有するものでなければならぬ。X及びYなる二箇の可變量の價值が不變價值Aに等しいならば、X及びYの受ける總べての變化に在つて、凡そXの取得する價值はYによつて喪失せられなければならず、又凡そYの取得する價值はXによつて喪失せられなければならぬこととなる。這般の命題の逆も亦眞でなければならぬ。(ibid., pp. 30-31)。而して、種々なる事情の下に於いて、労働者の一定數の賃銀を形成する産物の可變量の價值は、前述の如く相反的に變化しつゝある労働及び利潤なる二要素の價值より構成せらるゝが故に、不變でなければならず、

斯くて又、正しく標準的尺度として提唱せらるゝを得るものと、マルサスは信じたのである。(ibid., p. 32)。

六

マルサスに取つては、價值の共通の尺度に對する探求は純然たる學問的問題ではなかつた。而して、彼れは、其の決定の爲めに價值の標準尺度が最も格段に要求せらるゝ問題の中に、通貨の價值に於ける變化に關する其れがあると思惟した。洵に、當時に於ける緊切なる問題の一は貨幣價值變化の原因であつた。其の原因は労働に影響するものではなくして、貨幣に影響するものである。而して、是れ等の原因は二種である。第一は、より劣悪なる土地の累進的耕作と關聯せるものであり、又、普遍的に且つ必然的に總べての他の貨物と共に貴金屬の上に作用し、而して労働との關係に於いて是れ等のものを引き上げ若しくは引き下ぐる利潤率の高低を致す所のものであつて、彼れは是れを以つて金屬貨幣の價值高低の第一且つ必然的原因と名附けらるゝを得可きものと觀る。第二は、鑛山の豊度及び距離、種々なる國々に於ける労働の種々なる能率、輸出せらるゝ貨物の多寡、並びに貨幣と比較せられた諸貨物及び労働の需要及び供給の狀態に依存する所のものであつて、金屬貨幣の價值高低の第二且つ偶發的原因と名附けらるゝを得可きものである。第一原因から生じつゝある貴金屬の價值に於ける下落を特色附ける徵證は、加工貨物の價格に於ける一般的騰貴を伴はざる原産物及び労働の貨幣價格に於ける騰貴である。他方に於いて、貨幣の價值が第二原因から下落する際には、穀物及び労働と等しく總べての貨物の比例的騰貴を來すの傾向があるであらう(或る場合には其の完全に生ぜしめらるゝ迄には可成りの時を要す可きではあるが)。而して、概して、貨幣價值に於ける下落が利潤率に於ける下落を伴はずして生ずる際には常に、それは労働に對する貨幣の關係に影響しつゝある偶發的及び第二位的原因に歸せらる可きものであつて、より劣悪なる土地が耕作せらるゝに至るの事實と關

聯せるものものに歸せしめらる可きではない。是れ等二種類の原因中、第二のものは相異なる國々に於いて、又同一國內に於ける相異なる時期に於いて、最も顯著なる金屬貨幣の價值に於ける相違の遙かに最大なる部分を生ずる。(Ibid., pp. 62-65.) 第二位的及び偶發的原因是第一原因から生じつゝある結果を完全に克服することが屢々である。労働の能率増進と輸出貨物の豊富とは其の結果として生ずる穀物及び労働に對する大なる需要と相俟つて、農業收益の増加及び高利潤が地金を高價ならしめ而して穀物を低廉ならしむるよりも地金を低廉ならしむる上に於いて一層有力であることが屢々である。前戰役中に於いては、吾人は這般の例證を有し、而して戰後に於いては反對の明かなる例證を有する、とマルサスは思惟したのである。利子及び利潤の率が前戰役中に在つて比較的高かつたことは疑ひ得ざる所であり、而して、這箇高率の利潤は自然に労働の地金價格を低下せしむる傾向を有す可きではあつたが、而も斯くの如きものは穀物及び労働に對する活潑なる需要が労働を包含する貨幣價格を一般に引き上げる傾向によつて平衡せしめらるゝ以上であつて、其の結果は、此の時期の最大部分を通じて、地金の價值に於ける下落となつて現れたのである。戰後利子及び利潤率が低下したことは殆んど疑ふことの出來ぬ所であり、而して、此の低利潤率は労働の地金價格を引き上げる自然的傾向を有す可きではあつたが、而も、斯くの如きものは穀物及び労働に對する不活潑なる需要が一般に價格を引き下ぐる傾向によつて平衡せしめらるゝ以上であつて、其の結果は金の價值に於ける騰貴及び通貨の價值に於ける更らに一層大なる騰貴とつて現れたのである。(Ibid., pp. 66-67.)

マルサスは實に經濟史、殊に一千七百九十年以後に於ける物價及び貨幣統計を解釋するの鍵を握らんことを切望して特に價值尺度の探求を重視した。彼れは這般の問題に對するリカードオの懷疑と冷淡とを以つて、半ばは彼れが歴史的精神を有することなきの事實によつて説明せらる可きものと觀て居つた。

七

此の小冊子を注意深く讀んだりリカードオは、一千八百二十三年四月二十九日、倫敦からマルサスに書を寄せて、「私が貴下の書に對して與へることの出來た最も慎重なる考察の後、私は貴下が使用する意味に於いての労働を適當なる價值の尺度として考察するに於いて貴下に同意することを得ない」と記してある。結局、彼れを以つて觀れば、マルサスは可變的尺度を不變的尺度として選んだのである。(Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus 1810-1823, ed. James Bonar, 1887, pp. 214, 215.) 次いで彼れは五月三日、シモン・ラムシィ・ブカラムクに宛てた書翰の末文に於いて、「貴下はマルサス氏の價值尺度に關する書を見たか。彼れの主張は始めから終りまで不條理なるの觀がある」云々と記し、「Letters of David Ricardo to John Ramsay McCulloch, 1816-1823, ed. by J. H. Hollander, Publications of the American Economic Association, vol. x, No. 5-6, Sep. and Nov., 1895, p. 151.」更らに同月二十八日、七月十三日、八月三日、同十五日、同三十一日のマルサス宛書翰、並びに「リカードオ・ツラワー宛同年七月二十四日及び八月三十一日の書翰中に於いても此の問題を論じてゐる」。(Ibid., pp. 218-240; Letters of David Ricardo to Hutches Trower and others 1811-1823, ed. James Bonar and J. H. Hollander, 1899, pp. 210, 212.)

次いで、リカードオの讚美者トマス・ジ・クインシーは同年「倫敦雜誌」(London Magazine)の十一月號に『マルサスの價值尺度論』(Malthus on the Measure of Value)を寄せ、次いで翌三十四年の同誌三月四月及び五月號に『經濟學に關する三人の法學生の對話』(Dialogues of Three Templeys on Political Economy: chidly in relation to the Principles of Mr. Ricardo.)を登載し、マルサスに對してリカードオを辯護した。彼れは、マルサスが多

數の他の人々と共に、價值尺度の發見に對して最も不合理なる重要性を附せるものと觀た。彼れは如何なる人に向つても經濟學の大關心事が全然道般の尺度缺乏によつて損害を受けたることなきを示さんとする。彼れはそが精々無益なる少數の好奇的問題に答ふるに終る可きであると做した。(London Magazine, May 1824, p. 560; The Collected Writings of Thomas De Quincey, by David Masson, 1897, vol. ix, pp. 96-97.)

内在價值の存在及び單に諸貨物中に體現せられたる勞働量に依據して價值を等一化するの可能性を拒否したサミューエル・ペーリーは前掲ツ・クインシーの所言を引用した後に於いて、吾人は取得せられ若しくは思考することの出来る唯だ一種の尺度を有するものであつて、吾人は吾人の好奇心の満足を凡そ如何なる價值の尺度にも求むることなく、前時代の記録及び是れ等のもの、供給する諸資料よりする少數なる計算に求めなければならぬと做した。(A Critical Dissertation on the nature, measures, and causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers, 1825, p. 138.)。彼れは其の著の第七章に於いて特に「マルサス氏によつて提唱せられた價值の尺度に就いて」論じ、マルサスが勞働の不變の價值を確證せんことを企圖する方法は實に異常であり、而して、道般の目的を以つて作製せられ其の著の三十八頁に掲げられた彼れの「勞働の不變的價值及び其の結果を例證する表」は慥かに經濟學の全範圍に於ける最も奇妙なる產物の一であり、絶対に何物をも立證するものではないと論じた。(ibid., pp. 142, 148.)

リカードオは前掲一千八百二十三年八月三十一日附マルサス宛書翰に於いて、「我が親愛なるマルサスよ、そして、もう私は爲したつた。他の論争者等と同様に、多くの論議の後、私共は各々私共自身の意見を依然として保持してゐる。是れ等の論議は、然し、斷じて私共の友誼に影響するものではない。貴下が私と意見が一致したとしても、私は現

在以上に貴下に好感を持つことはなうであらう」と述べてゐる。これが吾人に傳はるマルサス宛リカードオの書翰の最後のものである。(Letters of Ricardo to Malthus, op. cit., p. 240.)。リカードオは其の後幾許ならずして耳の疾患を以つて九月十一日、壯齡五十二にして歿した。「私は自己の家族以外の如何なるものをも斯程迄愛したことは會つてなかつた」と稱した通り、リカードオの死によつて受けたマルサスの悲みは其の友情に於けると等しく、眞理探求の上にも亦深かつた。彼れ等が共に研究しつゝあつた目的物は全然眞理であつて、其の以外の何物でもなかつたのであるから、彼れは彼れ等が早晩一致するに至らなければならぬと思惟せざるを得なかつたのである。(Edinburgh Review, Jan. 1837, p. 499.)

## 八

マルサスはリカードオの死後尙ほ生き長らへて此の問題の研究を續けた。ジェームズ・ボナーの記す所に據れば、一千八百二十五年及び二十七年に書かれた價值尺度に關する二篇の丹念なる文書はマルサスが、彼れのリカードオとの相違を小ならしむるに傾くに至つたことを示すものであると云ふ。是れ等の文書は彼れが王立合衆王國文學協會(Royal Society of Literature of the United Kingdom)の准會員として其の義務を履行せるものである。(Transactions of Royal Society of Literature of the United Kingdom, vol. i, pt. 1, 1827, and vol. i, pt. 2, 1829; James Bonar, Malthus and his Work, 2nd ed., p. 263.)。第一のものは一千八百二十五年五月四日に朗讀せられた『諸商品の供給に必要な諸條件の尺度に就く』(On the Measure of the Conditions necessary to the Supply of Commodities)であつて、其の主題は、獨占物に非ざる總べての貨物の供給の自然且つ必要な條件は是れ等のものが平均して支配す可き勞働によつて表示せられ又測定せられ、而して他の如何なるものによつても然か

せらるゝことがないと云ふに存する。第二のものは、一千八百二十七年十一月七日に朗讀せられた『諸貨物の價値なる名辭に最も常に又最も正しく附せしめらるゝ意味に就して』(On the Meaning which is most usually and most correctly attached to the term, "Value of Commodities.") である。其の主題は、價値なる名辭が制限的形容詞若しくは可能なる交換に於ける何等特殊の等價物に拘ることなく使用せらるゝ際には、それは供給の諸條件に關するものであると云ふに存する。ボナールに従へば、一括せられた是れ等兩文書は二十三年の小冊子『價値の尺度』と三十六年に出版せられた『原論』再版の之れに關聯せる部分に於いて取られた態度の間接の證明の一種を形成するものであつて、之れを要約して次ぎの如くに述べらるゝを得可きである。即ち、一物品によつて支配せらるゝ労働は概して該物品の費用の尺度である、——而も、該物品の費用は人々が概して其の價値によつて意味する所のものである、——是に於いて乎、一物品によつて支配せらるゝ労働は其の言葉の普通の意義に於ける該物品の價値の尺度である、と云ふものが是れである。(Bonar, op. cit., p. 264.)

マルサスは此の第二の文書を發表したと同じ一千八百二十七年に『經濟學に於ける諸定義』(Definitions in Political Economy, preceded by an inquiry into the rules which ought to guide political economists in the definition and use of their terms; with remarks on the deviation from these rules in their writings.) に於て、吾人が或る一定の場所及び時に於ける貨物の價値を、其の保持せらるゝ尊重によつて表明せらるゝと看做すと、吾人が之れを全然需要と比較せられた供給の状態に基かしめらるゝものと看做すと、吾人が之れを、人々が之れを取得するが爲めに敢て拂はんとしてある犠牲により、若しくは其の供給の自然且つ必要なる條件により、若しくは其の生産の原費により、若しくは其の生産者等の數により、若しくは其の上に作用しつゝある價値の總べての原因の結果により

決定せらるゝものと看做すも、孰れにしても、それが或る一定の場所に於いて支配するを常とす可き労働が其の自然且つ通常の價値を測定す可く、而してそれが現實に支配す可き労働が其の市場價値を測定す可きことが明かであると説いた。(Ibid., p. 222. 尙ほ此の點に關しては、昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷四八九—四九五頁参照)。

マルサスの『經濟原論』は久しく品切れとなつて居つたのであるが、彼れが價値に關する其の新しい意見に適合せしめるやうに之れを書き改める迄は其の再版は現れることがなかつた。(Advertisement to the Second Edition. Principles of Political Economy, 2nd ed. with considerable additions from the author's own manuscript and an original memoir, 1836, p. x.) 而して彼れの死後、一千八百三十六年に至つて現れた其の再版に於いては、單に交換に於いて支配せらるゝ標準労働が總べての時及び所に於ける價値の尺度であると云ふ見解が採られたのである。測定せらるゝものが如何なる價値若しくは如何なる種類の價値であるかを正確に告げることが甚だ困難である。更らに其れ以上に何物も附加せられない時には一物件の價値は内在的交換價値(intrinsic value in exchange)の意義に解せられる。這般の定義は「之れを所有せんとする願望及び之れが所有を取得するの困難に基かしめらるゝ一貨物が見積らるゝ評價」と云ふに恰も等しいものであつて、曩きに吾人によつて引用せられた『諸定義』中に於いて與へられた一貨物の交換價値の定義と全然一致するものである。(Ibid., p. 60.) 内在的交換價値は、一特殊貨物によつて所有せらるゝ一般的購買力ではなくして、凡そ如何なる種類のものであらうとも、需要と比較せられた其の供給の制限に與つて力のあつた總べての原因を包含する内在的原因より生じつゝある其の購買力である。(Ibid., p. 96.) 之れに對し、第一の貨物が交換せらる可き總べての異なる貨物を所有せんとするの願望及び其の所有を取得するの困難に影響する諸原因は正しく其の購買力の外附的原因と名付けらるゝを得可きである。(Ibid., p. 57.) 而して、

マルサスは其の一つはエドワード三世の時代に於いて、又他のものはウィリアム四世の時代に於いて生産せられた二貨物の價值を比較し、而して、先づ明瞭を期するが爲めに、標準として取る可き各時期の普通農業労働は正確に同一程度の力のものであり、而して同一時間数の間使用せられ、更らに又、是れ等の時期に於いても、其の間の中、間時の總べてを通じても共に、此の種の労働のみによつて生産せられ、又直接に市場に齎さるゝ一定の諸貨物の存することを想定する。彼れを以つて觀れば、恐らく斯くの如き想定は、エドワード三世時代以後の英國に於いては眞實を去ること甚だ遠いものではなかつたであらう。彼れは、該時期の人々の體力が現在と畧々同一であつたこと、並びに、農業労働の普通一日の仕事が畧々同一の長さであつたことを想定せんとしたのである。而して、總べての時に於いて、労働のみによつて生産せらるゝ少數の貨物の存することは一般に承認せらるゝ所である。爾く生産せられた諸貨物は、あらゆる特殊の時期に於いて、平均して、是れ等のものを取得するが爲めに使用せらるゝ労働の量に従つて相互に交換せらる可きことが明かである。而して、一時期に於いて爾く生産せられた諸貨物の價值を他の時期に於いて爾く生産せられた諸貨物と比較するに於いて、各々の時期に於いて正確に同一性質の同一労働量によつて生産せられ而して直ちに市場に致された諸貨物が、普通、各々の時期に於いて需要に對し同一の割合に於いて供給せられ又同一價值のものと料せらる可きことを承認しないことは殆んど不可能なるの觀があると、マルサスは觀たのである。(ibid., pp. 96-97.)

九

此のマルサスの「原論」再版の公表と共に、斯問題は事實上暫く英國經濟學から消え去つた觀がある。然しながら、それは決して此の書中の論述が這般の問題に最後の解決を與へたと云ふ意味に於いてではなかつた。リカード

才學徒に對すると等しくマルサスに對しても亦反對であつたロバート・トレンズ大佐は夙に、「存在し、若しくは存在すると想像せられ得る市場に出づ可きあらゆる貨物は其の購買遂行力に於いて斷えず變化しつゝあるが故に、交換價值の尺度若しくは標準を發見するの不可能なるは、實際上あらゆる物が其の寸法及び比重に於いて不斷の變化を受けつゝありとしたならば、長さ若しくは重さの度量を取得すること能はざるに等しきものである」と做し、前記ローグデールの所言を引用して、價值尺度の探求を以つて仙丹の搜索に外ならざるものと斷定した。(An Essay on the Production of Wealth with an appendix in which the principles of Political Economy are applied to the actual circumstances of this country, 1821, p. 65.) 佛蘭西のジャン・バチスト・セーはリカードの「原論」佛譯中に於ける其の評註に於いて「不變的價值尺度は純然たる妄想である」と説いた。(Des Principes de l'Economie Politique et de l'impôt, 2me éd., 1835, p. 12. n.) シモン・スチュアート・ミルは此の問題に關して「價值の尺度に關して、是れ迄經濟學者の間に多くの論議が存して居つた。此の題目に對しては適當の重要性が附せられて來た。而して之れに關して記された所ものは、經濟學者等の思辯は言葉争ひであると云ふ甚だ誇張はされてゐるが、而も全然根據がなくはない非難に少なからず寄與したのである。然しながら、單に之れに就いて言はる可きものが如何に妙いかを示すに止めるとしたならば、此の題目に觸れるの要がある」と做してゐる。(Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy, vol. II, 1848, p. 98.) 彼れは、價值の尺度の觀念が價值の規制者即ち決定原理の觀念と混同せられてはならぬことを注意した。リカード及び其の他の者によつて、一物件の價值は労働の量によつて規制せられると稱せられた時、彼れ等は該物件が交換せらる可き労働の量を意味するのではなくして、之れを生産するに要せらるゝ量を意味するのである。然るに、アダム・スミス及びマルサ

スが労働は價値の尺度であると稱した時、彼れ等は其の物件が作られ若しくは作らるゝを得る労働を意味するのではなくして、それが交換せられ若しくは購入する労働の量、換言すれば、労働に於いて見積られた其の物件の價値を意味する。是れ等二個の觀念を混同するは寒酸計と火との間の區別を看過すると畧々同様なる可きである、と彼れは結語してゐる。(Ibid., pp. 102-103.)

マルサスは他の問題に於けると等しく此の價値尺度の其れに於いても左思右想し、其の所説は變化した。而して、彼れは労働の價値にして不變であるならば、それはあらゆる價値の尺度として使用せられ得るものと思惟し、而して、一貨物中に使費せられた労働は幾多の場合に於いて著大なる困難なくして確められることを得ないが、其の支配可き労働は常に分明にして瞭然たるものであると觀るに至つた。(Measure of Value, op. cit., p. 54, n.)。支配労働説は固とアダム・スミスの學説であつた。而も、彼れは常に矛盾なきを得なかつた。マルサスは恐らくスミスに比して更に一貫せるものであらう。然しながら、彼れは價値の尺度として労働を實際に適用するに於いて殆んど其の先輩以上に成功することがなかつたのである。時代は「實際に存在する以上に規則性と單純性とを有する」リカードオの經濟學を承認して、「獨創的ではあるが而も散漫なる要素の混亂である」マルサスの經濟學を閉却した。(cf. Torrens, op. cit., p. v.)。更らに、ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズの語法を以つてすれば、彼れは「リカードオ・ミル學派の一致と勢力とによつて戰場から驅逐せられたのである」。而も、ジェヴォンズは、マルサスを以つてシェニイオアと共に、リカードオ・ミル學派よりも遙かによく眞學説を會得せるものと看做してゐる。(The Theory of Political Economy, 2nd ed., 1897, p. lvii.)。洵に彼れは其の需要供給法則の敘述に於いて英國價値學説の進歩に貢献する所が大であつた。英國經濟學に於ける此の法則の歴史は、彼れの後に於いて、ミル、ケアンズ

及びマーシャルを経て進展する。然しながら、價値尺度の問題に至つては、彼れの論議は唯だ徒らに繊細微妙であつて、著しく其の價値動なきものと觀られてゐる。嚴密に言へば、如何なる永續的價値尺度も存することを得ざるの觀がある。此の點に於いてリカードオの懷疑的態度は正當なるが如くに見える。價値の尺度は其れ自體不變でなければならぬ。而も、如何なる貨物と雖も、價値の完全なる安定性を有することがない。斯くの如きは、價値が一貨物に固有なる性質に關するものではなくして、或る人が其の貨物の領有の望ましきことに關して下した見積に關するの事實から生ずるものである。一言にして盡せば、それは價値の人間の要素から生ずる。問題はマルサス自身が其の『原論』初版中に於いて認めたが如く、價値の完全なる尺度を取得せんとするに存せずして、寧ろ誤差少なきものを選ばんとするに存す可きである。

不變的價値尺度の問題は永く消滅し去ることなく、或ひは小麦若しくは穀物を以つて、或ひは不熟練労働者の一日の仕事を以つて、或ひは限界的労働の不效用を以つて、或ひは客觀的若しくは全部效用に於いて、又、曩きにマルサスが穀物と労働との間の中數に求めたとは殆んど全く相異れる選擇の原理に基ける複合若しくは計表に不變的尺度を求めんとするの企圖が行はれたのである。マルサスの學示せる價値尺度は固より後世の承認する所とならなかつたのであるが、而も之れを探索せんとするの精神は遂に失はれることがなかつたのである。

私は本書の原版を所蔵することなく、又慶應義塾圖書部も之れを備ふることがなかつたので、已むなく大原社會問題研究所所蔵のものを借用することとした。本篇の初めに寫直版として登載したものは同原書から撮つた其の表題頁である、吾人が本解題中に於いて引用したマルサスの『原論』、同氏宛リカードオの書翰、ペーリーの『批判』

等に就いては、夫々吉田秀夫氏、中野正氏、鈴木鴻一郎氏等の邦譯が存してゐる。而して、吾人は今や又、マルサスの『價值の尺度』が三邊清一郎氏によつて邦譯せられ、經濟學振興會版として發兌せられんとしつゝあるの欣びを有するものである。同會より需めらるゝが儘に自ら揣らすして茲に此の蕪雜なる解題を草することとした。

## 島恭彦著「財政政策論」

永田清

現代財政學の課題が奈邊にあるかは論者によつて各々その所見を異にする。しかしその様々の課題のうちにあつて、財政と生産力の問題が中心であることは、凡そ異論のないところであらう。もちろんこの問題の視野は甚だ遠く、その核心を捉へることは一層困難である。蓋しここにいふ生産力の概念は經濟學上において尙ほ未決定の分野といふべく、更にこれと財政理論との接觸は、近時漸く研究の緒を摸索し得たといふにすぎないからである。かくの如き學問的情況は却つて研究者の熱意と努力とを求めることが劇しい。ここに紹介する島恭彦教授の「財政政策論」はかかる要求に應ずる稔多き勞作である。

本書は大別して二部よりなる。第一部は財政政策の理論であつて、ここでは主として財政學と經濟學との交渉が取りあげられてゐる。財政學と經濟學との交渉といへば、その研究範圍は甚だひろい。かくの如く廣汎な分野を對象とする場合には、何よりも先づ、研究の狙ひとその軌道とがしつかりと据ゑられておなければならぬ。著者はかかる目的を果すために、次の三つの問題をあげてゐる。第一に、財政學と經濟學との交流を、この二つの學說の裡に求めようとする。即ち先づ「資本主義上向期の財政改革論」として、古典學派に於ける財政學の位置を明らかにし、